

社会学・生命倫理

粥川 準二

自分を試されるような
読書体験をした。

科学は〈生命〉をどう
捉えてきたのか。科学史
では「機械論vs生氣論」
という対立図式で解説さ
れることが多い。しかし
小松美彦『〈生命〉とは
何か 科学的生命観、2
600年の歴史とその超
克』（筑摩選書）は、そ
の見方自体が間違ってい
ることを古代ギリシャま
で遡って論証し、まった
く別の図式を提示する。

杉田俊介『無能力批評
増補完全版』（月曜社）
は、二〇〇八年に刊行さ
れた同名の批評集の「増
補完全版」。ある一章は
完全に差し替えられ、そ
こでこの新版の立場であ
る「無条件無能力主義」
が全面的に展開される。

下山進『命を選ぶ 遺
伝病の運命に抗ったある
女性の物語』（祥伝社）
は、網膜芽細胞腫という
遺伝性の小児がんを抱え
る女性が、着床前診断
（PGT-M）を受ける
権利を求めて活動し、や
がてその適応基準が徐々
に見直されていく過程を
記録している。著者は、
着床前診断を含む出生前
診断に批判的な人々も取

材しているのだが、取材
対象を描く記述は、良く
も悪くも感情的すぎる。
それでも重要な歴史記録
であろう。（かゆかわ・
じゅんじい 叡啓大学准教
授・社会学・生命倫理）